日本遺族通信
令和8年7月15日
第907号
一般財団法人日本遺族会
〒102-0074 東京都千代田区九段南一丁目六番五号 九段会館テラス四階
電話 03－3261－5521
振替 00160-6-25389
編集発行人 亜井 敦
毎月1回15日発行
定価 1部130円（税込）

日本遺族会は国の礎となられた英霊顕彰をはじめ、戦没者の遺族の福祉の増進、慰藉救済の道を開くと共に、道義の昂揚、品性の涵養に努め、世界の恒久平和の確立に寄与することを目的とする。

## 令和9年度予算要望
# 平和の語り部拡充強化へ
## 全国戦没者遺族代表者会議

日本遺族会は6月30日、来年度政府予算の概算要求に向け、自由民主会館で全国戦没者遺族代表者会議を開催した。平和の語り部事業の拡充強化を最重点要望事項に据えて、出席した関係省庁、自由民主党国会議員に、戦争体験者と次世代が学校等で児童・生徒に向け語り部として記憶を継承することの重要性を伝え、次世代育成費の拡充、国際親善交流の充実等を訴えた。

全国戦没者遺族代表者会議には、全国の遺族代表235人が自由民主会館8階ホールに集結し、開催された。

会議は、國政隆昭副会長の開会の辞で始まり、水落敏栄会長は冒頭の挨拶で、「戦没者への慰霊追悼は平和を心に刻む貴重な機会。人生をかけて、確実に記憶を次世代へ伝え、児童・生徒に思いを繋ぎ、次世代の語り部を育成する」と決意を表明した。

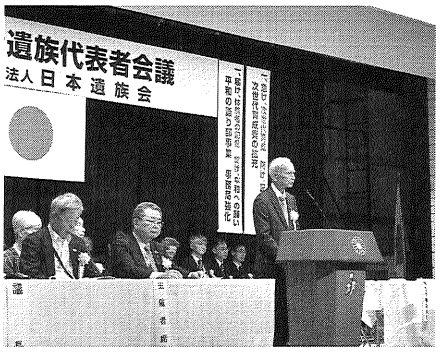
そして、上野賢一郎厚生労働大臣、松本洋平文部科学大臣、高橋克法総務副大臣、小林鷹之政務調査会長、逢沢一郎遺家族議員協議会会長、有村治子総務会長が来賓として挨拶した。上野厚労大臣、松本文科大臣はともに、本会の取組みを評価。平和の語り部事業が学校で更に活用されるよう、両省が連携し、次世代への記憶継承に注力することを約束した。

その後、安齋満副会長が議長に選任され、浜崎和則鹿児島県遺族連合会副会長が意見発表した。

浜崎氏は、今年3月父が戦死したミャンマーに慰霊友好親善事業で次世代とともに訪問したことに触れ、慰霊祭、小学校の生徒たちとの交流等を通じて国際親善交流の重要性を感じたと語り、「語り部事業を拡充強化し戦争の記憶を若い世代に伝え、恒久平和の構築を目指す努力を次世代と重ねていかなければならない」と訴えた。文科大臣の出席、挨拶は初。衆参128人（本人）が出席、会場は活気に溢れた。

次に甘竹勝郎常務理事が「体験者に猶予はない。直に話すことが出来る今こそ次世代育成を」と力強く宣言し、大石綾子常務理事が決議案を朗読。「次世代育成」、「事務局体制強化」、「国際交流」の3点を高らかに読み上げ、満場一致で採択された。今田勇雄常務理事の発声で萬歳三唱し、江田肇常務理事の閉会の辞で大会は終了した。

終了後、遺族代表は、地元選出自民党国会議員に本会の要望実現に理解と協力を求め陳情した。



ミャンマー小学校交流等を通じ国際親善交流の重要性を意見発表する浜崎氏＝6月30日、自由民主会館で

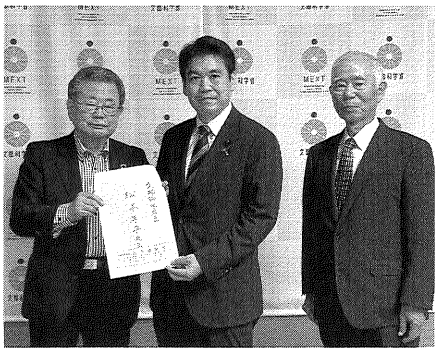
## 語り部事業周知依頼
### 文科大臣・厚労大臣へ要望

6月12日水落敏栄本会会長、宮寺賢一小平市遺族会会長、重井敦次長他担当職員は、松本洋平文部科学大臣に面会した。

昨年、文科省は厚労省からの協力依頼を受け、各都道府県教育委員会等へ2回（5月、12月）事業の周知、活用を通知した。結果、学校等における講話が前年度比約4倍増の808回を数えた。水落会長は文科省の協力に対し、感謝を伝え、今年度も同様の通知の発出を依頼した。

大臣の地元小平市宮寺会長からは学校での取組みに加え、市民に記憶を継承するため昨年制作された記念誌が手渡された。

松本大臣は国民の大半が戦後生まれとなり、家庭で話し合う機会もない昨今、記憶を伝える語り部の取組みに感謝が伝えられ、教科書では伝えることのできない貴重な機会だと評価し、通知発出に向け厚労省との連携が約束された。


地元小平市の宮寺会長と共に語り部事業の周知を依頼＝6月12日、文部科学省大臣室で


上野厚生労働大臣に協力依頼発出を求める水落会長＝6月16日、厚生労働省大臣室で

6月16日、水落会長、重井次長他担当職員は上野賢一郎厚生労働大臣に面会し、事業に対する理解、協力に感謝を伝え、昨年同様文科省へ協力依頼の発出を求めた。加えて自治体の追悼式における語り部披露や関連企画により参列した関係者から依頼につながるケースも紹介し、福祉担当局への通知に謝意を伝えた。

上野大臣は、全国における取組みを評価。事業の重要性に鑑み、文科省との連携と自治体福祉担当への通知が約束された。

## 遺家族議員協議会総会を開催
### 次世代育成費の拡充を要望

6月26日、遺家族議員協議会総会が開催され、本会より水落敏栄会長、國政隆昭、安齋満両副会長が出席した。

水落会長より依頼増の要因となった文科省通知発出に伴う厚労省への協力に謝意を伝え、喫緊の課題である次世代育成の増額を要望。その後、重井敦事務局次長が要望の大綱を説明し、最重点要望「平和の語り部の拡充」について担当者が説明。学校等児童・生徒向けの講話が前年度比4倍増となった実績、講話・対話・体験と多様な形態を複合させ、体験者・次世代・児童・生徒が多方向に学びあえる点が評価されていると分析し、永続的事業とするため、国内外の遺構視察、講話会など研修費の増額、講話、研修を支える事務局体制の強化に加え、体験者、次世代との国際交流親善の充実を求めた。また、「体験者の記憶を直に聞ける最後の世代」とする生徒の感想に触れ、確実に次世代に伝承すべく模索する遺族会にもっと語り部をと訴えた。

厚生労働省は実施回数、創意工夫を評価し、今後も遺族会と連携をとの回答。総務省からは恩給年額は国家補償の理念堅持と説明がなされた。

衆参55人の議員が出席し、事業の重要性、遺族会活動を評価する声が複数、予算拡充を求める意見が多数あり。また、慰霊碑の管理に自治体が関与すべきとの指摘もあった。

逢沢一郎会長は「節目を越えて更に重要となった記憶継承。語り部事業の更なる拡充を」と呼びかけ散会となった。


遺家族議員協議会総会で語り部の重要性を訴える逢沢会長＝6月26日、自由民主党本部で

## 支部長交代
### 宮城県で

宮城県で役員改選が行われ、新会長が就任した。

▼宮城県連合遺族会
晴山 宗規氏
（6月8日付）

## 謹哀悼

**濱元昌宏氏** 日本遺族会元評議員。富山県遺族会元副会長。

令和8年6月9日、逝去された。92歳。告別式・葬儀はウィングホールひみで行われた。喪主は長男、与志宏氏。

## 声なき声

日本には昔から「涼をとる」という文化、習慣がある。視るからに涼しげな金魚鉢、食べると頭がキーンとなるカキ氷、風に揺れて音を奏でる風鈴、玄関先に撒いて気温を下げる打ち水、縁側でほのかに香る蚊取り線香といった五感で夏を感じる日本ならではの生活様式はいかにも風流である▼樋口一葉は「飛ぶ蛍 ひかりさびしく 見ゆるまで なつはふかくも なりにけるかな」と、淋しく輝く蛍の光に命のはかなさを感じながら、過ぎ行く夏を詠んでいるが、校庭に低く舞う赤とんぼの群れ、夕暮れ時に「カナカナ…」と鳴くひぐらしといった、夏の終わりを感じた子供のころの思い出が誰にでもあるのではないだろうか▼昨今は地球温暖化の影響によって、局地的な豪雨をもたらす線状降水帯の発生や毎年のように更新される最高気温などで、災害、熱中症対策を優先しなければならないため、涼を味わう余裕もなくしてきているかもしれない▼夏の風物詩である花火大会が、運営する自治体の財政難、警備費用の高騰といった理由で開催の中止が相次いでいるらしい。毎年恒例だった大輪の打ち上げ花火が観られなくなるのは寂しい限りだ▼この夏はエアコンが効いた室内から、せめてベランダに置いた行灯づくりの朝顔でも眺めて、涼をとろう。（S）

# 平和の語り部大会を開催

## 記憶を継承し次世代育成へ

本会は遺族の記憶と地域の歴史を体験者と次世代青年部が共に伝え、戦争の悲惨さ、平和の尊さを児童・生徒と共に考える各種企画を通年で実施している。昭和100年記念「記憶継承」をテーマとした企画を6月29日から3日間にわたり開催した。上半期のハイライトとなった「平和の語り部大会」の熱気に包まれた会場の模様を紹介する。

昭和100年記念企画

6月29日、本会は語り部事業の広報と育成を企図した昭和100年記念「平和の語り部大会」を自民党ホールを貸し切り、盛大に開催した。

開会式で水落敏栄本会会長は「喫緊の課題は次世代育成。記憶を継承し語り部へ」と呼びかけた。多くの国会議員が駆けつけ、拡大一心会（戦没者の子、孫、ひ孫、甥、姪でつくる国会議員の会）を代表して坂本哲志衆院予算委員長（孫）が挨拶に立ち「直に体験を聞ける今こそ、次世代へ継承するコンテンツの制作を」と訴えた。

この他、田村憲久遺家族議員協議会会長代行、渡辺猛之事務局長、堀内のり子総務副大臣、中野英幸総務大臣政務官（埼玉県青年部長、孫）、西山尚利議員（福島県青年部長、孫）も駆けつけた。

冒頭本部より大会意図、全国の事例が紹介され、記憶継承の動画制作等の説明があり、その後体験者、次世代其々の講話が披露された。

体験者として甘竹勝郎本会常務理事（岩手県遺族連合会会長、遺児）が「大切な命」を講話。

甘竹氏は社会科教員から大船渡市長へ転身、遺族会はじめ各種団体への講演活動は年間100件以上。豊富な知識、経験から戦争の背景、父との別れ、母の労苦、苦学した学生時代を伝え、現役引退後、初めて訪れた父の戦没地で驚くほど大きな声で「お父さん」と叫んでいたと語り、息子の復員を信じた母の切なさを伝える歌謡浪曲「岸壁の母」を総立ちで合唱した。

次世代として荒堀修一本会ブロックアドバイザー（兵庫県遺族会青年部長、孫）が講話。

加西市鶉野飛行場跡を平和学習の場に再開発する仕事をきっかけに遺族会活動へ参加するようになった荒堀氏は同市制作の平和学習資料（スライド）を使用して戦中の児童のくらし、同飛行場から特攻として散華された方々の遺書から伝える講話を披露。次世代として模索しながら語り部事業を広げたいと語った。

その後、記憶継承（戦没者を忘れさせない英霊顕彰）の意味を再考する映画「日本遺族会三十年のあゆみ」、学校講話に使用するため福島県遺族会が制作した動画を視聴し、語り部の重要性、永続性を共有認識して閉幕。

懇親会には逢沢一郎遺家協会長、伊東良孝（北海道会長）栗原渉厚労大臣政務官（福岡県青年部長）、山口俊一、秋葉賢也議員（孫）、橋本聖子、山谷えり子、福岡資麿議員が駆けつけた。



スローガンを読み上げ、次世代育成へ協力を求めた田中玉喜女性部長＝6月30日、九段会館テラスで

## 女性部「語り部」研修会を開催

### 求められる効果的な学校講話

日本遺族会女性部は昭和100年記念平和の語り部研修会として、昨年に続き「女性部に求められる語り部」をテーマにより具体的な学校講話の効果的な内容、動画制作、パネル制作のための座談会を開催した。

冒頭水落敏栄会長は学校講話が令和6年度比4倍増となったことに謝意を伝えた。喫緊の課題は次世代育成とし、青年部全国結成を導いた女性部の力添えを依頼した。

田中玉喜女性部長は同日午前に行われた代表者会議のスローガンを読み上げ、女性部から語り部を広げ次世代を育成しようと呼びかけた。

次に、本部より研修会の意図を説明。次世代の講話を補完する体験者の記憶証言映像の制作が求められた。

その後、体験者の語り部として、瀬長和枝女性部長が沖縄戦を伝える講話を披露。住民を巻き込んだ地上戦の最中、母の決死の覚悟で生まれた自身の生い立ち、ガマや捕虜収容所での悲惨な暮らしや教員退職後、遺族会活動を本格的に始め、先輩方に倣い参加した遺骨収集について話した。

また、戦争の話をしなかった母から90歳を過ぎて、かつて捕虜収容所で母乳を分けてと頼みに来た父子はどうしただろうと問われ胸が痛んだことに触れ、語り部事業で記憶を継承する決意を語った。

次世代として、長崎県連合遺族会青年部副島真紀さんが絵本の読み聞かせから伝える講話を披露。

副島さんは、図書ボランティアで出会った絵本「すみれ島」をきっかけに、祖母から海軍飛行兵として戦死した大叔父のことを、中国戦線から帰還した祖父から戦場の様子を聞いて育った経験から戦争に纏わる絵本と大叔父のアルバムの紹介を始め、夏休み前に学校にアルバムを貸し出し、児童に考えてもらう取組みを説明。戦後生まれとして家族の記憶から平和を伝えたいと思いを語った。

記憶継承のための学校講話に使用する動画の先行事例（福島県、東京都、静岡県、本部）を視聴した。

大場盛子福島県女性部長（本会女性部副部長）は学校へ行く前に県内の被害を理解し、遺族、引揚げ者、記憶が鮮明な体験者の話を加えたと説明。

また、東京都遺族連合会が令和7年度に収録した女性部のインタビューの中から能美松江副部長の動画を視聴。能美副部長は、父が戦死後、母は生活基盤を整えるため東京で仕事。自身は祖父母に育てられた意識が強く晩年まで母とわだかまりがあった。戦争がなければこんな思いは抱かなかったと胸中を吐露した。

静岡県庁制作の動画より、慰霊巡拝から父への思いを語る動画、忠霊塔から戦争と平和を考える動画と、加えて記憶継承を再考する「日本遺族会三十年のあゆみ」を視聴。本部は、体験のない次世代が講話する際の補完資料として、証言動画の制作を求めた。

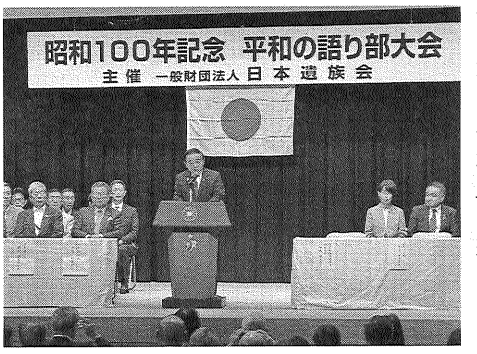
ブロック別の座談会では、学校講話で使用する説明用パネルの内容を話し合い「学生に想像が出来るか問いかけ」「学童疎開など児童の暮らしに沿って」「母の労苦を」「修学旅行先に多い原爆投下について」「平和へのメッセージ」とブロックで様々な意見が出された。

懇親会には加藤明良議員（拡大一心会、孫）など関係議員が駆けつけ女性部の活動を称えた。

会を総評した田中部長は、研修会は出席者も多く内容も含め大きな成果があったと振り返り、自らが語り部となり次世代の育成に尽力しようと呼びかけ幕をとじた。




沖縄戦について講話する沖縄県瀬長和枝女性部長＝6月30日、九段会館テラスで




語り部大会に駆けつけた坂本哲志衆院予算委員長（戦没者の孫）＝6月29日、自民党本部ホールで

## 第35回 評議員会を開催

本会は6月11日、第25回評議員会を開催し、理事の一部改選、令和7年度事業報告書並びに収支計算書等について審議した。

東京の九段会館テラス4階の本会会議室にて午前10時30分に開会、北浦基広氏（兵庫県）が議長に選出された。

理事の一部改選では、新たに辻正人氏（滋賀県）が理事に推薦され選任され、令和7年度事業報告書並びに収支計算書等について審議され、いずれも承認された。

また、第37回理事会で審議・承認された「終戦80年からの組織強化3カ年計画」、「英霊顕彰運動の経過並びに今後の運動方法」、「令和9年度政府予算に要望事項」をはじめとする12項目について事務局の説明があり、評議員からは、「平和の語り部事業推進は遺族会活動の明暗を左右する要の大事な事業、本部がリーダーシップをとっていることに感謝したい」と労いがあった。他に特別弔慰金の継続と増額に加え、支給要件の緩和、次世代への継続支給などについて意見が交わされた。




慰霊友好親善事業の体験を通した語りを披露する甘竹勝郎常務理事＝6月29日、自民党本部ホールで

「慰霊の日」
沖縄県

# 平和祈願慰霊大行進
## 語り部の「体験型」一環として

6月23日、沖縄は23万余の尊い命が失われた地上戦が終結して81年目の「慰霊の日」を迎えた。県内各地で戦没者の冥福を祈る慰霊事業が執り行われる中、本会は沖縄県遺族連合会と共催の第65回沖縄平和祈願慰霊大行進を昭和100年記念事業「平和語り部研修会」とあわせて開催。全国各地から遺児、孫、甥、姪等54人が参加した。



ひめゆりの塔を出発し摩文仁を目指す行進団＝6月23日、糸満市で

81年前の沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい地上戦で、20万人以上が犠牲となった。県はこの犠牲を風化させないため旧日本軍の組織的戦闘が終わったとされる6月23日を「慰霊の日」と定めている。

昭和36年琉球政府が定めた「慰霊の日」に鑑み、翌37年より本会は沖縄県遺族連合会と共催で平和祈願慰霊大行進を実施している。コロナ禍で中止された3年間を除き、重ねられてきた大行進には、今年も全国から戦没者の遺児をはじめ孫、甥、姪等を含めた54人が参加した。

22日、那覇市内ホテルでの結団式に続き、沖縄協会主催の沖縄全戦没者追悼式前夜祭が摩文仁の沖縄平和祈念堂で挙行され、開式、献火、献鐘と続き、献花では、行進団の本会代表として松尾敏一奈良県遺族会会長が花を捧げた。

23日、県内外から約350人がひめゆりの塔に参集し出発式を開会。我部政寿沖縄県遺族連合会会長、水落敏栄日本遺族会会長が挨拶し、沖縄戦の遺児代表らが横断幕を掲げて出発した。

今回の行進は、平和の語り部事業の「体験型」の一環として行われ、行進団は先人たちの歩んだ道程を平和への祈りを込めて辿り、ひめゆりの塔から糸満市の摩文仁まで約4キロを行進。猛暑の中苦難の撤退を追体験した。

出発から約1時間半後、摩文仁の平和祈念公園に到着し、沖縄県主催の全戦没者追悼式に参列した。

式典には高市早苗内閣総理大臣をはじめ、衆参両院議長が揃って参列し開式。式辞、黙祷に次いで我部沖縄県遺族連合会長が追悼のことばを述べ、玉城デニー沖縄県知事の「平和宣言」に続き、「平和の詩」では、豊見城市立豊崎中学校二年の亀谷琉奈さんが朗読。文書を見ずして訴えかける姿に、会場内は大きな拍手と涙に包まれた。

式典終了後、行進団は公園内と米須地域に建立されている縁の慰霊碑を各々参拝し、御霊の安らかならんことを祈った。

同夜、沖縄県遺族連合会の方々との懇談会が開催された。

戦没者の孫、ひ孫ら次世代を担う参加者らは今回体験した感想を語り、戦没者遺児と世代を超えて交流を深めた。



全戦没者追悼式会場に横断幕を持って入場する遺児と次世代代表＝6月23日、摩文仁平和祈念公園で

## 初の語り部研修会を開催
### 平和祈願慰霊大行進で

6月24日、第65回沖縄平和祈願慰霊大行進全体を語り部研修と位置づけた企画として、昭和100年記念平和の語り部研修会を沖縄で開催した。

22日、結団式で水落敏栄本会会長は、22日から24日までを語り部研修と捉え参加してほしいと呼びかけ、同日の前夜祭に向かう車中より説明を開始。（22日、23日の詳細は別掲）

24日の初の語り部研修会では、沖縄県我部政寿会長が凄惨な沖縄戦の記憶を遺族会の責務として語り継ぐと表明した。

次いで、本部より昭和35年第2回青年部（遺児）研修に沖縄県青年部を招き交流を深めたことが契機となり、36年青年部代表の沖縄派遣、翌37年沖縄県青年部により大行進が開始され、その後、本会と共催になった大行進の軌跡を説明し、遺児の思いから創設された事業で現青年部に継承してほしいと伝えた。

続いて、県内学校で語り部をしている瀬長和枝女性部長の講話では、激しい地上戦を受け緊迫したガマや捕虜収容所での状況、復興までの長い道のりを伝え、「命が宝」と訴えた。

また、パラオでの戦争体験を伝えた平川信子氏は幸せな家族生活から一転、戦況の悪化から父が現地応召、母子での苦難の様子を涙ながらに伝え「私が話すことで犠牲となられた方の供養になれば」と語った。

その後、参加者54人中半数が次世代の座談会で（遺児）、父の思いを胸に（次世代）、出来ることから積み重ねる、大行進が繋いだ縁を紡いで（次世代）等の感想や、活発な意見が交わされ、来年の再会を約束し、講話・対話・体験、複合形態の研修会は好評のうちに終了した。参加者は後日報告書を提出し、本部は次年度に向け研修内容の充実に努める。


平川さんの講話の感想、記憶の継承を話し合った座談会＝6月24日、沖縄で



研修会後の集合写真＝6月24日、沖縄で

## 本会への賛助金のお礼

本会の活動に賛同し、賛助金を寄せていただいた左記の方々に対し、心よりお礼申しあげます。

なお、賛同者の都道府県名については、送金方法により居住地が特定できない場合があるため、省略します。

**賛同者名**（敬称略・カタカナ名は銀行振込、漢字名は現金書留等）

本庄節、木田ヤエ子、木村千春、小鹿充徳、原田民子、深澤英樹、山下明、野見山正美、小野洋、井本和彦、榮貴代、ウエノレイコ（以上、5月28日から6月末日まで）

皆様からいただいた賛助金は、本会が実施している英霊顕彰、戦没者遺族の処遇改善、戦没者遺骨収集事業等のさまざまな遺族会活動に利用させていただいています。

**本会事業参加者の皆様へ**

本会の事業に参加するに当たり、得た個人情報は「個人情報保護法」の定めに則り、厳重に扱います。日本遺族会の個人情報保護方針につきましてはホームページを参照されるか、本会にお問い合わせください。

## 追悼のことば



一般財団法人 沖縄県遺族連合会
会長　我部　政寿

本日、ここに沖縄県主催による「令和8年沖縄全戦没者追悼式」が執り行われるにあたり、戦没者遺族を代表して謹んで哀悼の誠を捧げ、諸霊のご冥福を心からお祈り申し上げます。

今年は、あの凄惨を極めた沖縄戦終結から81年、肉親を亡くしたご遺族の心情を察するとき、その傷はあまりにも深く今もって癒える事はありません。

1945年米軍は、沖縄諸島に上陸し沖縄戦が始まりました。

3月16日に慶良間諸島、4月1日には、沖縄本島に上陸、日米両軍の激しい戦闘が一般住民をも巻き込んで三カ月余にわたり繰り広げられ日米両軍、軍属、一般住民あわせて、二十万余の尊い命が失われました。

戦没者諸霊は、激しかった沖縄戦及び外地において祖国の安泰を願い家族を案じつつ遂に尊い生命を祖国のために捧げられたのであります。今、霊前に立ち、在りし日を偲び諸霊に対する追慕の情は更に深く、新たなる痛恨の念が胸に迫ることを禁じ得ません。今日の平和と繁栄は、皆様の犠牲の上に築かれたものである事を私達は決して忘れてはなりません。

沖縄戦終結から81年が過ぎた今も世界に目を向ければ2022年に始まったロシアの軍事侵攻によるウクライナ戦争、4年を経過した今もなお戦争は続いています。近年のイスラエルのパレスチナ自治区、ガザ地区への攻撃、レバノン・イランとの戦闘状態が続き中東情勢も緊迫しており、一旦起きた戦争を終わらせるのは非常に困難である事を示しています。

私達戦没者遺族は、戦争遺族をつくる如何なる戦争にも反対し、世界の恒久平和の訪れる事を希求するため、県内各地、全国から遺族、それに賛同する人々が参集し、英霊の顕彰と平和運動を推進するため本島南部の激戦地米須から摩文仁まで平和祈願慰霊大行進を実施しております。高齢となった遺族と戦争を知らない孫やひ孫世代が一緒になって行進に参加しております。

先代から受け継いできた戦没者遺族会、その遺児たちも戦後81年の歳月で高齢になり、これからの遺族会の組織の維持活動も困難になることが危惧されます。

しかしながら私達には戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え、二度と戦争の惨禍を繰り返さないために次世代へ伝承していく責務があります。

戦没者遺族会では、ありふれた日常が戦争によって奪われた話など、地域の歴史を交えて、平和の尊さを学ぶ機会として、学校現場へ出向いて「平和の語り部事業」を実施しております。戦争の無い、平和な社会を目指し、後世代へ戦争と平和について考える事業を実施していく所存です。

終わりに鑑み戦没者の皆様、安らかにお眠りくださいまして私たちの上に限りなきご加護を賜りますよう祈念申し上げ追悼のことばと致します。

令和8年6月23日

## 語り部事業 定期講話会

# ミャンマー遺児友好親善報告
## 次世代学生との座談会

戦争体験者の遺族と次世代が共に記憶の伝承に取組む本部主催第16回定期講話会。テーマは「ミャンマー遺児慰霊友好親善事業」。最終実施となった本年３月の参加者からの報告と戦後の体験、慰霊、遺骨収集の活動を通した思いが語られた。参加者の３分の２が次世代、その半数が学生となり活発な意見交換がなされた講話会を伝えたい。

６月11日に開催された第16回定期講話会では冒頭本部よりミャンマー慰霊友好親善訪問団の報告。令和７年度で惜しまれながら終了した本事業の最終実施地域ミャンマーの報告、訪問をきっかけに寄贈した小学校の現状を伝えた。その上で「慰霊に終わりはない」とする遺児の思いと同行した次世代による記憶の継承、国際親善を継続したいとの思いを伝えた。

次に本年３月本事業に参加した東京都目黒区遺族会東川雄一会長が講話。東川会長は自身の戦後の体験から語り始めた。戦後一年半経過してから届いた戦死公報には「野戦病院で戦病死」と記載してあったが、戦後戦友（世話役）により作成された遺族を慰めるための記録で自身は信じていなかったが、初めてミャンマーを訪ねた際「病院ではなく、誰にも看取られることなく亡くなった。これが現実」と確信したと語り、夫の消息が分からないこの時期が母の一番つらかった時期と偲んだ。

東川氏は学生時代、戦後の社会の変容に伴う教師の言葉、遺児に対しての冷ややかな視線を感じつつ育ちながら、大学進学後、恩師と出会い、すべての出会いに感謝したことにより家を継いだ事情もあり、定年退職後に父を思い遺族会活動に参加し、慰霊巡拝参加をきっかけに遺骨収集事業にも参画したと語り、事業実施のため、相手国自治体、関係機関との調整が非常に大切と話し、遺骨収集、慰霊巡拝とも現地の協力なしに不可能であり、交流を継続することの重要性を示した。

続いて体験者・次世代・学生の座談会では次の質疑応答があった。

**問１：旧戦域への慰霊巡拝について**

慰霊へ行って、遺族会活動、遺骨収集事業に参画した。次世代と共に行く意義がある（体験者）。旧戦域に興味がある。誰でも行けるような機会があれば（次世代）。

**問２：次世代が記憶を継承する方途について**

遺族会活動の周知が記憶の継承（体験者）。家族、友人身近な人に伝える（体験者／次世代）。社会科の教員を目指していて、この学びを伝えたい。報道機関に内定し、発信する側になりたい（次世代）。暗記する学びではなく、考える歴史にフォーカス。参加者は報道等への発信に加え、より身近な人へ、遺族以外に広く伝える重要性を共有認識し終了した。

次々回は、８月８日次世代による遺骨収集の講話会を開催予定。沢山の参加をお待ちしている。



小学生の際に受け取ったご遺骨に代わる砂を見せる東川会長＝６月11日、九段会館テラスで


体験者と次世代、学生の座談会＝６月11日、九段会館テラスで

## 昭和館
# めくるめく紙芝居
## 館蔵印刷紙芝居コレクション

昭和館の３階企画展会場では、昭和１００年記念 特別企画展「めくるめく紙芝居―館蔵印刷紙芝居コレクション―」が７月18日（土）から９月６日（日）まで開催される。

一点ものの手描きの原画を用いて街中で上演する紙芝居を「街頭紙芝居」と呼び、昭和初期において人気を博した。その後誕生した「印刷紙芝居」は、大量生産が可能であり、教育や啓蒙活動を目的として制作された。本展覧会では、館蔵のコレクションを中心に、印刷紙芝居が担った役割を紹介する。

展示は三部構成になっており、「Ⅰ．印刷紙芝居の誕生と展開」では、印刷紙芝居が誕生し、児童への教育・普及を目的に発展していく様子を紹介する。

「Ⅱ．戦争と印刷紙芝居の活用」では、戦時下に焦点を当てる。国策宣伝のための手段として注目されるようになった印刷紙芝居の役割や、兵士・疎開児童の娯楽として用いられた紙芝居を展示する。

「Ⅲ．印刷紙芝居の再出発」では、戦後、業界全体として民主化を目指し、学校教育や保育現場での活用を目指した足跡を概観する。

映画「父は九段の桜花」を紙芝居化した作品や、日本画家・安西啓明による永井隆著「この子を残して」の紙芝居原画など、館蔵の印刷紙芝居を展示する。




## 九段短歌

作品をお寄せください。

選者　村田　信昌

七夕の空は戦火の記憶持つ千葉市が受けた七夕空襲
千葉県　石橋　喜子

今日こそは戦争の記事ない事を期待しながら新聞を待つ
山梨県　三森　一雄

父の顔も知らずに生きし八十年今日は父の日遺影に拝す
滋賀県　雨森　貴子

水が湧き簞笥をぬらした壕はいま二坪の窪地つめ草埋む
青森県　田中　恭子

戦争の体験話す語り部に同じ痛みを吾も遺児なり
山形県　菊地　幸子

「お母さん」こらえ忍びしつらき日々あなたのかわりに幸せもらい
長崎県　安原　恭子

国民の心ひとつになりにけり十一時二分のサイレン鳴りひびく時
長崎県　富永八重子

――◇――

七月七日は七夕。願い事を書いた色とりどりの短冊や飾りを笹の葉に吊るし、星に祈りを捧げる習慣が今も残っております。一方、今月のお歌に、81年前大東亜戦争末期の七月七日未明、千葉市街地に投下され千二百名近くの方が死傷された「七夕空襲」を詠まれたものがございました。何と残酷な災禍に溢れた記憶でありましょうか。平和な時代に生かされている私たちは、二度とこの様な凄惨な記憶を作らないためにも、本来七夕に由来する平穏な祈りを続けたいと願うばかりです。

（選者）

### お詫び

本紙６月（第９０６号）発行の４面「九段短歌」で、作品の作者を山梨県・土屋喜雄氏と記載しましたが、正しくは「三森一雄」氏の誤りでした。

ここに訂正し深謝いたします。

改めて本月号の九段短歌に作品を加え、紹介いたします。

## 九段短歌 作品募集

日本遺族通信の九段短歌では、読者の皆様の作品を募集しています。

◎作品には必ず住所、氏名を明記してください。

お寄せいただいた作品の返却はいたしませんので、予めご了承願います。

また、青年部皆様の作品も歓迎します。

## 地方だより

各支部遺族会で実施された大会等は次の通り。

▼北海道　６月４日
第57回全道戦没者遺族大会（１８０人）

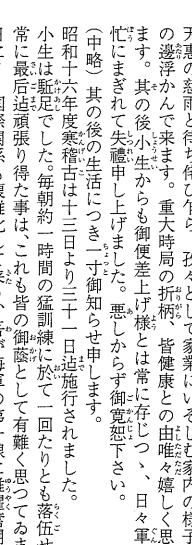
▼秋田県　６月４日
令和８年度一般財団法人秋田県遺族連合会第十四回評議員会（48人）

▼岩手県　６月17日
令和８年度岩手県遺族連合会研修会（１３２人）

# 家内一同様

海軍三等兵曹　弦間　貢

昭和十六年十一月六日
千葉県・東京海軍通信隊船橋分遣隊にて公務死
山梨県東山梨郡勝沼町出身　二十歳




謹啓　本日御便拝受熟読いたしました。
天恵の慈雨と待ち侘び乍ら、孜々として家業にいそしむ家内の様子が目の邊浮かんで来ます。重大時局の折柄、皆健康との由唯々嬉しく思はれます。其の後小生からも御便差上げ様とは常に存じつゝ、日々軍務多忙にまぎれて失禮申し上げました。悪しからず御寛恕下さい。
（中略）其の後の生活につき一寸御知らせ申します。
昭和十六年度寒稽古は十三日より三十一日迄施行されました。小生は駈足でした。毎朝約一時間の猛訓練に於て一回たりとも落伍せず、常に最后迄頑張り得た事は、これも皆の御蔭として有難く思つてゐます。日に〳〵国際関係も複雑化して来り、吾が海軍の第一線に雄躍奮闘し得る時期も程近い事と思ひます。
御國に献げし身体、何時なりとも死に合決心で、多忙な軍務に毎日〳〵元氣良く従事いたしてゐます。
一生懸命勉強して通校にも早く行き度き決心です。（中略）
向寒の折、皆様の御健勝切に御祈りします。
一月三十一日　草々
貢より
家内一同様

＊「通校」は海軍通信学校のこと
【令和八年七月靖国神社社頭掲示】愛しきものへ